

# 親の教育意識に関する研究

島 山 豊 吉

## I. 序

本研究の動機並びに経緯は次の通りである。昭和39年度以降国が補助金を交付して全国的に開設している家庭教育学級は、その開設の背景に青少年の非行防止のための家庭対策、能力開発政策に対応する家庭教育振興対策、社会開発政策に対応する家庭対策など国の政策に対応する文部省の社会教育施策として発想され、はじめから行政路線に乗って整った構想をもって展開されてきたものである。<sup>1)</sup>したがってその教育は定型的形態をもっている点において長所をもつものであるが、学習者の主体的条件とそれを形成する社会的背景に基づいて学習者が学習を求める自主的な社会教育現象としての運動過程が殆んどみられないで、国の家庭教育学級補助基準の枠組みによって定型化され、いわゆる文部省版家庭教育学級が誕生し今日に及んでいるのである。このように家庭教育学級は前述の如く国の政策に対応する文部省ルートの行政によって枠組みされて発足したものであるため、その学習内容は一般的抽象的なものにとどまって、社会教育本来の立場である学習者や地域の問題や実態に即応して企画化されることにおいて不十分な状態である。即ち家庭教育学級の学習内容は、文部省の家庭教育学級補助金交付基準に示された要項並びに文部省社会教育局編集家庭教育学級資料の内容、領域や構想にとらわれ過ぎて、その形式的側面に視点をうばわれて、学習者や地域が求める教育要求に相応しない面がでていいる。このような家庭教育学級の固定化を招来した理由は前述の如くはじめから中央行政機関において発想して行政路線に乗せた社会教育であること、補助金制度の問題、開設実施担当者の能力並びにそれら担当者のもつ企画において発揮できる自由裁量の限界など種々な点をあげることはできるが、教育計画の基本的立場に立ってこの問題に対処するならば、それは教育計画にのぞむ基本的な態度である学習者を知るということにある。殊に社会教育は社会人の教育要求に応え、その生活に即応して計画化されなければならないことを本質とする点に鑑みて、真に家庭教育学級の教育活動を学習者のものにするためには学習者の家庭教育意識やその態度の実態を把握することが基本的要件となるのである。したがって本研究は親の家庭教育意識並びに態度について、家庭教育の基本的問題や今日的問題に対する考えや態度を調査して、親の教育観の実態を捉えようと試みたものである。

家庭教育学級に関する研究は、昭和39年度発足初年度の現状を捉え、その問題点を指摘して以来関心をもって注目したのであるが、岩手県教育庁社会教育課が家庭教育学級の学習内容の再編成に着手するに当って、この基礎的研究の依頼を受けて本研究活動に入った経緯のものである。<sup>2)</sup>

調査対象地は岩手県の主な地域類型の中から各1典型地域を選定し、水田農村の前沢町生母、旧宿場町の地域の東町大原、農漁村の三陸町越喜来、工業都市の釜石市小佐野、商業都市の花

1) 室俊司, 和田典子, 北田耕也, 家庭教育学級の二つの道 月刊社会教育 No. 126-1968-5 p. 61~62.

2) 島山豊吉 家庭教育学級の現状と課題, 岩手県教育委員会, 昭和40年度, 婦人教育基礎研究報告書

巻市花巻以上5地域が調査対象地域である。

調査は質問紙によって実施したものであるが、調査票は4部から成っている。第1部幼児の親を対象とする調査票、第2部小学生の親を対象とする調査票、第3部中学生の親を対象とする調査票、第4部親を対象とする調査票、第1～3部の調査票は子供の発達段階に応じてもっている家庭教育に対する考えや態度を捉えようとする内容であるが、第4部は幼児、小学生、中学生のすべての親を対象にして、教育に関する基本的な考え並びに家庭教育に関する今日の課題に対する考えを明らかにしようとしたものである。

本稿は第4部の調査結果を基にして考察するものである。

## II. 設問とその考え方

第4部の設問は教育に関する基本的な考え並びに家庭教育の今日の問題に対する考えを明らかにすることを目的としたものである。調査内容は次の通りである。

1. 長男が生まれたときは、家をつぐものができてよかったと思った。
2. 長男が生まれていないので、1のような経験はない。
3. 男の子は女の子にくらべて高い教育(学校)をうけさせなければならない。

以上の問いは権力構造をもって組み立てられた日本の伝統的な家が、敗戦後の日本国憲法、民法などの法的措置によって、法制上消滅したのであるが、夫婦親子を軸とする家族集団は今日も尚、制度的にも実際上も厳然として存在しているのである。制度上新しく誕生した家に新しい意識が発生して、新しい家庭教育の基盤がどの程度できているかを捉えることを目的に設定したのは以上の問いである。尚、問2は長男が生れていない親の数をとらえて、問1の分析において、長男をもたない親を排除するためのものである。

4. 子どもの性格は育てかたより、生れつきによるところが大きい。
5. 子どもの性格は生れつきより、育てかたやまわりの人々のえいきょうが大きい。
6. 子どもの才能は教育より生れつきによるところが大きい。
7. 子どもの才能は生れつきより教育によるところが大きい。

4～7の問いは学問上も問題があり、それぞれ相対立する学説もあるほどの問題であって、教育学や心理学のずぶの素人である一般の親の考えなど問題でないと思う者もあるかもしれない。

しかしわが子を育てた経験や身近に生じた事例を種々見聞して得た親の素直な考えを捉えることは、この問題に対する学問的な立場からも、また家庭教育学習者としての親の教育意識を捉えこれを知る上でも有意義なことであると考えるのである。

8. 子どもの教育上夫婦と子どもだけが住む家庭のほうがよい。
9. 子どもの教育上夫婦と子どもだけでなく、祖父母がいっしょに住む家庭のほうがよい。
10. 子供の教育上夫婦ともかせぎで、母親が家をあけるのはよくない。
11. 子どもの教育上夫婦ともかせぎで、母親が家をあけるのはよくないと思わない。

8～11の問いは今日当面している家庭教育の問題であって、8～9は旧い家族制度の崩壊にもなって生じた新しい家庭意識並びに新しい小家族生活の経験や見聞による間接的経験を通じて、この問題をどのように考えているであろうか。また10～11の問いでは、夫婦とも稼ぎについて、子供の教育という面からどのように考えているのであろうかという疑問である。この問題は夫婦とも稼ぎは教育上よくないに決っているのでは済まされない問題であって、労働婦人に家庭復帰を単純に呼びかけるための伏線としての設問ではない。尚、幼児、小学生、中学生の親を対

象とする第1～3部調査票において、それぞれ子供の教育上の障害となっている事柄について設問しているのであって、この設問との関連を用意して夫婦とも稼ぎの背景を捉える用意をしているのである。また室氏などの言う婦人労働者の後退を招来しないような家庭教育学級を創造するためにも、正確に知ることが必要であると考えからである。<sup>3)</sup>

12. 子どもの教育は幼稚園や学校にまかせることはいちばんよい。

13. 子どもの教育は幼稚園や学校だけのものでなく、家庭でなければならないものがある。

12～13の問いはとかく教育即学校教育と考えられている傾向や家庭における教育と家庭教育の概念が区別されていないではないかという疑問によるものである。<sup>4)</sup>

### III. 表について

本表は昭和43年6月1日～30日間に調査したものを表示したものである。

尚、第11～12表の釜石市の調査対象数は他の表における対象人数と異っているが、これは各分析視点の中で幼・小・中別にのみ分類ができて、他の分析視点別においては分類不可能であったことによるものである。

表示の各表の表側番号1～13は、IIにあげた各設問番号とその内容を示すものである。

第1表 回答者総数

市町名	釜石	花巻	前沢	大東	三陸	合計
回答者数	299	335	299	285	234	1,452

第2表 地域別反応状況

選択肢番号	釜石		花巻		前沢		大東		三陸		合計	
1	125	38.5	135	40.3	162	54.2	186	65.3	126	53.8	734	50.6
2	46	15.4	56	16.7	50	16.7	26	9.1	27	11.5	205	14.1
3	127	42.5	108	32.2	75	25.1	84	29.5	46	19.7	440	30.3
4	56	18.7	58	17.3	63	21.1	80	28.1	50	21.4	307	21.1
5	235	78.6	266	79.4	225	75.3	194	68.1	141	60.3	1,061	73.1
6	60	20.1	63	18.8	85	28.4	91	31.9	61	26.1	360	24.8
7	207	69.2	217	64.8	163	54.5	150	52.6	120	51.3	857	59.0
8	136	45.5	117	34.9	85	28.4	84	29.5	52	22.2	474	32.6
9	86	28.8	128	38.2	137	45.8	132	46.3	115	49.1	598	41.2
10	235	78.6	261	77.9	215	71.9	194	68.1	150	64.1	1,055	72.7
11	17	5.7	20	6.0	12	4.0	21	7.4	8	3.4	78	5.4
12	38	12.7	36	10.7	22	7.4	49	17.2	24	10.3	169	11.6
13	255	85.3	295	88.1	259	86.6	225	78.9	191	81.6	1,225	84.4
NA	9	3.0	4	1.2	4	1.3	11	3.9	21	9.0	49	3.4

第3表 男女別回答者数

男	168	155	152	155	127	757
女	131	180	147	130	107	695

3) 室 俊司, 阿久津一子 二つの家庭教育観の検討 月刊社会教育 No. 127-1968. p. 98~99

4) 中島太郎 教育原理 p. 299

第4表 男女別反応状況

選択肢	性	釜 石		花 巻		前 沢		大 東		三 陸		合 計	
1	男	80	47.6	74	47.7	90	59.2	103	66.5	76	59.8	423	55.9
	女	45	34.4	61	33.9	72	49.0	83	63.8	50	46.7	311	44.7
2	男	30	17.9	23	14.8	20	13.2	8	5.2	13	10.2	94	12.4
	女	16	12.2	33	18.3	30	20.4	18	13.8	14	13.1	111	16.0
3	男	66	39.3	41	26.5	39	25.7	37	23.9	25	19.7	208	27.5
	女	61	46.6	67	37.5	36	24.5	47	36.2	21	19.6	232	33.4
4	男	35	20.8	21	13.5	30	19.7	40	25.8	29	22.8	155	20.5
	女	21	16.0	37	20.6	33	22.4	40	30.8	21	19.6	152	21.9
5	男	133	79.2	127	81.9	115	75.7	103	66.5	75	59.1	553	73.1
	女	102	77.9	139	77.2	110	74.8	91	70.0	66	61.7	508	73.1
6	男	33	19.6	19	12.3	41	27.0	45	29.0	33	26.0	171	22.6
	女	27	20.6	44	24.4	44	29.9	46	35.4	28	26.2	189	27.2
7	男	124	73.8	109	70.3	79	52.0	79	51.0	68	53.5	459	60.6
	女	83	63.4	108	60.0	84	57.1	71	54.6	52	48.6	398	57.3
8	男	74	44.0	58	37.4	49	32.2	42	27.1	26	20.5	249	32.9
	女	62	47.3	59	32.8	36	24.5	42	32.3	26	24.3	225	32.4
9	男	54	32.1	63	40.6	63	41.4	70	45.2	69	54.3	319	42.1
	女	32	24.4	65	36.1	74	50.3	62	47.7	46	43.0	279	40.1
10	男	135	80.4	117	75.5	105	69.1	103	66.5	75	59.1	535	70.7
	女	100	76.3	144	80.0	110	74.8	91	70.0	75	70.1	520	74.8
11	男	11	6.5	5	3.2	6	3.9	11	7.1	6	4.7	39	5.2
	女	6	4.6	15	8.3	6	4.1	10	7.7	2	1.9	39	5.6
12	男	24	14.3	12	7.7	11	7.2	23	14.8	14	11.0	84	11.1
	女	14	10.7	24	13.3	11	7.5	26	20.0	10	9.3	85	12.2
13	男	143	84.2	136	87.7	130	85.5	118	76.1	105	82.7	632	83.5
	女	112	85.5	159	88.3	129	87.8	107	82.3	86	80.4	593	85.3
NA	男	6	3.6	2	1.2	2	1.3	6	3.9	11	8.7	27	3.6
	女	3	2.3	2	1.1	2	1.4	5	3.8	10	9.3	22	3.2

第5表 家族構成別回答者数

家族構成	釜 石	花 巻	前 沢	大 東	三 陸	合 計
核 家 族	230	217	82	93	118	740
拡 大 家 族	62	118	208	170	102	660
不 明	7	0	9	22	14	52

第6表 家族構成別反応状況

選択肢	家 構	族 成	釜 石		花 巻		前 沢		大 東		三 陸		合 計	
1	核 拡 不	大 明	95	41.3	84	38.7	48	58.5	56	60.2	71	60.2	354	47.8
			28	45.2	51	43.2	109	52.4	116	68.2	49	48.0	353	53.5
2	核 拡 不	大 明	39	17.0	36	16.6	12	14.6	7	7.5	17	14.4	111	15.0
			5	8.1	20	16.9	36	17.3	16	9.4	10	9.8	87	13.2
3	核 拡 不	大 明	94	40.9	75	34.6	19	23.2	26	28.0	27	22.9	241	32.6
			32	51.6	33	28.0	53	25.5	53	31.2	15	14.7	186	28.2
4	核 拡 不	大 明	45	19.6	37	17.1	20	24.4	29	31.2	29	24.6	160	21.6
			10	16.1	21	17.8	40	19.2	46	27.1	17	16.7	134	20.3
5	核 拡 不	大 明	186	80.9	173	79.7	54	65.9	61	65.6	70	59.3	544	74.9
			46	74.2	93	78.8	166	79.8	124	72.9	63	61.8	492	74.5
6	核 拡 不	大 明	41	17.8	40	18.4	30	36.6	30	32.3	31	26.3	172	23.2
			18	29.0	23	19.5	54	26.0	57	33.5	26	25.5	178	27.0
7	核 拡 不	大 明	162	70.4	144	66.4	38	46.3	49	52.7	57	48.3	450	60.8
			41	66.1	73	61.9	119	57.2	91	53.5	56	54.9	380	57.6
8	核 拡 不	大 明	107	46.5	79	36.4	17	20.7	26	28.0	28	23.7	257	34.7
			28	45.2	38	32.2	64	30.8	56	32.9	21	20.6	207	31.4
9	核 拡 不	大 明	64	27.8	72	33.2	39	47.6	40	43.0	50	42.4	265	35.8
			19	30.6	56	47.5	94	45.2	78	45.9	59	57.8	306	46.4
10	核 拡 不	大 明	182	79.1	168	77.4	57	69.5	65	69.9	82	69.5	554	74.9
			47	75.8	93	78.8	152	73.1	114	67.0	64	62.7	470	71.2
11	核 拡 不	大 明	15	6.5	16	7.4	3	3.7	9	9.7	5	4.2	48	6.5
			2	3.2	4	3.4	9	4.3	10	5.9	3	2.9	28	4.2
12	核 拡 不	大 明	31	13.5	23	10.6	9	11.0	18	19.4	9	7.6	90	12.2
			7	11.3	13	11.0	10	4.8	28	16.5	11	10.8	69	10.5
13	核 拡 不	大 明	195	84.8	193	88.9	69	84.1	69	74.2	98	83.1	624	84.3
			55	88.7	102	86.4	183	88.0	143	84.1	84	82.4	567	85.9
NA	核 拡 不	大 明	9	3.9	0	0.0	2	2.4	5	5.4	10	8.5	26	3.5
			0	0.0	4	3.4	2	1.0	2	1.2	9	8.8	17	2.6
			0		0		0		4		2		6	

第7表 年代別回答者数

年 代	釜 石	花 巻	前 沢	大 東	三 陸	合 計
2 0 代	13	7	29	12	8	69
3 0 代	146	160	156	133	98	693
4 0 代	124	137	98	116	106	581
5 0 代	16	25	16	23	19	99
6 0 代~	0	2	0	1	3	6
不 明	0	4	0	0	0	4

第8表 年代別反応状況

選択肢	年 代	釜 石	花 巻	前 沢	大 東	三 陸	合 計
1	20 代	2	1	13	6	3	25
	30 代	53	53	79	77	45	307
	40 代	60	62	58	85	62	327
	50代~	10	17	12	18	16	73
	不 明	0	2	0	0	0	2
2	20 代	2	2	4	2	0	10
	30 代	29	26	35	14	19	123
	40 代	14	26	11	9	6	66
	50代~	1	2	0	1	2	6
	不 明	0	0	0	0	0	4
3	20 代	6	2	2	1	2	13
	30 代	67	51	39	40	19	216
	40 代	50	44	32	39	22	137
	50代~	4	9	2	4	3	22
	不 明	0	2	0	0	0	2
4	20 代	3	1	3	1	0	7
	30 代	21	29	28	37	13	128
	40 代	24	23	26	33	34	140
	50代~	8	4	7	9	3	31
	不 明	0	1	0	0	0	1
5	20 代	9	7	26	10	8	60
	30 代	117	122	114	94	65	512
	40 代	100	111	73	77	52	413
	50代~	9	22	12	13	16	72
	不 明	0	4	0	0	0	4
6	20 代	3	1	2	2	2	10
	30 代	23	33	41	40	17	154
	40 代	31	24	34	38	36	163
	50代~	3	5	8	11	6	33
	不 明	0	0	0	0	0	0
7	20 代	6	2	16	7	5	36
	30 代	103	97	82	72	52	406
	40 代	88	97	55	62	51	353
	50代~	10	17	10	9	12	58
	不 明	0	4	0	0	0	4
8	20 代	6	2	0	3	0	11
	30 代	64	57	41	35	17	214
	40 代	62	53	41	41	31	228
	50代~	4	5	3	5	4	21
	不 明	0	0	0	0	0	0

9	20代	2		1		20		4		6		33	47.8
	30代	44	30.1	56	35.0	69	44.2	58	43.6	44	44.9	271	39.1
	40代	33	26.6	52	38.0	42	42.9	56	48.3	52	49.1	235	40.4
	50代~不明	7		16		6		14		13		56	56.6
	不	0		3		0		0		0		3	
10	20代	12		5		17		9		7		50	72.5
	30代	109	74.7	132	82.5	114	73.8	89	66.9	62	63.3	506	73.0
	40代	104	83.9	104	75.9	71	72.4	79	66.4	66	62.3	422	72.6
	50代~不明	10		16		13		19		15		73	73.7
	不	0		4		0		0		0		4	
11	20代	0		0		2		0		1		3	4.3
	30代	10	6.8	8	5.0	7	4.5	9	6.8	3	3.1	37	5.3
	40代	5	4.0	9	6.6	2	2.0	11	9.5	4	3.8	31	5.3
	50代~不明	2		3		1		1		0		7	7.1
	不	0		0		0		0		0		0	
12	20代	2		1		2		1		1		7	10.1
	30代	26	17.8	16	10.0	15	9.6	23	17.3	8	8.2	88	12.7
	40代	9	7.3	16	11.7	4	4.1	21	18.1	14	13.2	64	11.0
	50代~不明	1		2		1		4		1		9	9.1
	不	0		1		0		0		0		1	
13	20代	8		6		26		10		8		58	84.1
	30代	112	76.7	141	88.1	131	84.0	110	82.7	81	82.7	575	83.0
	40代	112	90.3	120	87.6	89	90.8	88	75.9	85	80.2	494	85.0
	50代~不明	23		25		13		17		17		95	96.0
	不	0		3		0		0		0		3	
NA	20代	0		0		1		4		0		5	7.2
	30代	7	4.8	2	1.3	2	1.3	4	3.0	9	9.2	24	3.5
	40代	2	1.6	2	1.5	1	1.0	3	2.6	3	8.5	17	2.9
	50代~不明	0		0		0		0		3		3	3.0
	不	0		0		0		0		0		0	

第9表 職業別回答者数

職業分類	釜	石	花	巻	前	沢	大	東	三	陸	合	計
A		0		25		248		209		126		608
B		0		3		0		0		4		7
C		0		0		0		0		34		34
D		0		0		0		3		0		3
E		5		18		6		12		9		50
F		276		33		6		12		9		336
G		2		82		8		12		12		116
H		0		4		0		0		0		4
I		0		0		0		0		0		0
J		7		14		4		2		3		30
K		0		4		0		0		0		4
L		1		22		2		7		6		38
M		4		57		13		15		23		112
不明		4		73		12		13		8		110

(註) A 農業 B 林業 C 漁業 D 鉱業 E 建設業 F 製造業  
 G 卸・小売業 H 金融・保険業 I 不動産業 J 運輸・通信業  
 L サービス業 M 公務員

第10表 職業別反応状況

選択肢	職業別	釜 石	花 巻	前 沢	大 東	三 陸	合 計					
1	A	0	15	60.0	139	56.0	144	68.9	77	61.1	375	61.7
	B	0	1		0		0		4		5	
	C	0	0		0		0		18	52.9	18	52.9
	D	0	0		0		2		0		2	
	E	1	13		3		6		5		28	56.0
	F	117	42.4	12	36.4	5	7		2		143	42.6
	G	2		27	32.9	3	6		8		46	39.7
	H	0		2		0	0		0		2	
	I	0		0		0	0		0		0	
	J	1		7		3	1		0		12	40.0
	K	0		1		0	0		0		1	
	L	1		10	45.5	2	3		1		17	44.7
	M	0		20	35.1	1	10		8	34.8	39	34.8
不明	3		27	37.0	6	7		3		46	41.8	
2	A	0	5	20.0	44	17.7	20	9.6	11	8.7	80	13.2
	B	0	1		0		0		0		1	
	C	0	0		0		0		6	17.6	6	17.6
	D	0	0		0		0		0		0	
	E	1		2		0	0		1		4	8.0
	F	44	15.9	4	12.1	0	1		2		51	15.2
	G	0		17	20.7	3	1		1		22	19.0
	H	0		0		0	0		0		0	
	I	1		0		0	0		0		0	
	J	0		1		1	1		2		6	20.0
	K	0		0		0	0		0		0	
	L	0		1	4.5	0	2		1		4	10.5
	M	0		9	15.8	1	0		2	8.7	12	10.7
不明	0		16	21.9	1	1		1		19	17.3	
3	A	0	4	16.0	53	21.4	64	30.6	23	18.3	144	23.7
	B	0	0		0		0		0		0	
	C	0	0		0		0		7	20.6	7	20.6
	D	0	0		0		1		0		1	
	E	1		9		4	2		1		17	34.0
	F	118	42.8	1.1	33.3	1	5		1		136	40.5
	G	0		27	32.9	2	3		5		37	31.9
	H	0		3		0	0		0		3	
	I	0		0		0	0		0		0	
	J	2		7		3	0		1		13	43.3
	K	0		0		0	0		0		0	
	L	1		5	22.7	1	2		1	26.1	10	26.3
	M	1		21	36.8	4	5		6		37	33.0
不明	4		21	28.8	7	2		1		35	31.8	
4	A	0	4	16.0	54	21.8	65	31.1	34	27.0	157	25.8
	B	0	1		0		0		2		3	
	C	0	0		0		0		4	11.8	4	11.8
	D	0	0		0		1		0		1	
	E	1		6		0	4		3		14	28.0
	F	50	18.1	5	15.2	3	1		1		60	17.9
	G	1		17	20.7	0	1		5		24	20.7
	H	0		2		0	0		0		2	
	I	0		0		0	0		0		0	
	J	2		1		2	0		0		5	16.7
	K	0		2		0	0		0		2	
	L	0		2	9.1	0	2		0		4	10.5
	M	0		6	10.5	1	3		1	4.3	11	9.8
不明	2		12	16.4	3	3		0		20	18.2	
5	A	0	19	76.0	191	77.0	131	62.7	70	55.6	411	67.6
	B	0	2		0		0		2		4	
	C	0	0		0		0		22	64.8	22	64.7
	D	0	0		0		2		0		2	
	E	3		14		5	9		5		36	72.0
	F	218	79.0	27	81.8	5	11		5		266	79.2
	G	2		61	74.4	7	11		7		88	75.9
	H	0		2		0	0		0		2	
	I	0		0		0	0		0		0	



	J	4		12		1		2		2		21	70.0
	K	0		2		0		0		0		2	
	L	1		20	90.9	2		5		4		32	84.2
	M	4		49	85.0	9		11		16	69.6	89	79.5
	不明	3		58	79.5	5		12		8		86	78.2
6	A	0		5	20.0	72	29.0	72	34.4	38	30.2	187	30.8
	B	0		1		0		0		2		3	
	C	0		0		0		0		8	23.5	8	23.5
	D	0		0		0		1		0		1	
	E	0		5		1		5		4		15	30.0
	F	56	20.3	6	18.2	2		1		0		65	19.3
	G	1		15	18.3	3		3		4		26	22.4
	H	0		1		0		0		0		1	
	I	0		0		0		0		0		0	
	J	1		2		3		0		0		6	20.0
	K	0		1		0		0		0		1	
	L	0		3	13.6	1		2		1		6	15.8
	M	0		10	17.5	0		3		4	17.4	18	16.1
不明	2		14	19.2	3		4		0		23	20.9	
7	A	0		15	60.0	133	53.0	104	49.8	60	47.6	312	51.3
	B	0		1		0		0		2		3	
	C	0		0		0		0		17	50.0	17	50.0
	D	0		0		0		2		0		2	
	E	4		9		3		5		4		25	
	F	195	70.7	21	63.6	4		11		6		237	70.5
	G	0		47	57.3	4		9		4		64	55.2
	H	0		3		0		0		0		3	
	I	0		0		0		0		0		0	
	J	3		13		1		1		2		20	66.7
	K	0		3		0		0		0		3	
	L	1		14	63.6	2		4		4		25	65.8
	M	2		41	71.9	9		9		15	65.2	76	67.9
不明	2		50	68.5	7		5		6		70	63.6	
8	A	0		8	32.0	69	27.8	56	26.8	32	25.4	165	27.1
	B	0		2		0		4		0		6	
	C	0		0		0		0		6	17.6	6	17.6
	D	0		0		0		2		0		2	
	E	0		5		3		4		1		13	26.0
	F	127	46.0	15	45.5	1		5		0		148	44.0
	G	0		23	28.0	3		4		2		32	27.6
	H	0		1		0		0		0		1	
	I	0		0		0		0		0		0	
	J	4		9		2		0		0		15	50.0
	K	0		2		0		0		0		2	
	L	1		5	22.7	0		2		1		9	23.7
	M	1		19	33.3	3		5		4	17.4	32	28.6
不明	3		28	38.4	4		6		2		43	39.1	
9	A	0		10	40.0	117	47.2	100	47.8	63	50.0	290	47.7
	B	0		0		0		0		0		0	
	C	0		0		0		0		19	55.9	19	55.9
	D	0		0		0		1		0		1	
	E	2		7		2		5		6		22	44.0
	F	78	28.3	11	33.0	2		6		6		103	30.7
	G	2		31	37.8	4		7		6		50	43.1
	H	0		1		0		0		0		1	
	I	0		0		0		0		0		0	
	J	1		2		2		1		1		7	23.3
	K	0		1		0		0		0		1	
	L	0		12	54.5	1		3		2	43.5	18	47.4
	M	3		27	47.4	5		4		10		49	43.8
不明	0		26	35.6	4		5		2		37	33.6	
10	A	0		22	88.0	174	70.2	136	65.1	83	65.9	415	68.3
	B	0		2		0		0		2		4	
	C	0		0		0		0		20	58.8	20	58.8
	D	0		0		0		3		0		3	
	E	4		13		4		9		6		36	72.0
	F	218	79.0	30	90.9	5		9		4		266	79.2
	G	0		59	72.0	7		10		10		86	74.1
	H	0		4		0		0		0		4	



第11表 幼小中別回答者数

		釜石	花巻	前沢	大東	三陸	合計
幼小中	幼	100	116	82	77	71	446
	小	89	109	107	98	81	484
	中	114	110	110	110	82	526

第12表 幼小中別反応状況

		釜石		花巻		前沢		大東		三陸		合計	
1	幼小中	32	32.0	34	28.4	35	42.7	35	45.5	33	46.5	169	37.9
		37	41.6	46	42.2	59	55.1	64	65.3	44	54.3	250	51.7
		56	49.1	55	50.0	68	61.8	87	79.1	49	59.8	315	59.9
2	幼小中	25	25.0	23	19.8	19	23.2	11	14.3	12	16.9	90	21.2
		7	7.9	19	17.4	19	17.8	12	12.2	9	11.1	66	13.6
		14	12.3	14	12.7	12	10.9	3	2.7	6	7.3	49	9.3
3	幼小中	40	40.0	31	26.7	17	20.7	15	19.5	13	18.3	116	26.0
		43	48.3	38	34.9	30	28.0	33	33.7	16	19.8	160	33.1
		44	38.6	39	35.5	28	25.5	36	32.8	17	20.7	164	31.2
4	幼小中	13	13.0	17	14.7	7	8.5	10	13.0	12	16.9	59	13.2
		13	14.6	24	22.0	24	22.4	33	33.7	18	22.2	112	23.1
		30	26.3	17	15.5	32	29.1	37	33.6	20	24.4	136	25.9
5	幼小中	80	80.0	95	81.9	69	84.1	63	81.8	51	71.8	358	80.3
		72	80.9	83	76.1	79	73.8	65	66.3	43	53.1	342	70.7
		83	72.8	88	80.0	77	70.0	66	60.0	47	57.3	361	68.6
6	幼小中	13	13.0	23	19.8	14	17.1	16	20.8	15	21.1	81	18.2
		19	21.3	21	19.3	32	30.0	38	38.8	21	25.9	131	27.1
		28	24.6	19	17.3	39	35.5	37	33.6	25	30.5	148	28.1
7	幼小中	71	71.0	71	61.2	49	59.8	44	57.1	38	53.5	273	61.2
		64	71.9	72	66.1	57	53.3	53	54.1	40	49.4	286	59.1
		72	63.2	74	67.3	57	51.8	53	48.2	42	51.2	298	56.7
8	幼小中	47	47.0	45	38.8	17	20.7	19	24.7	12	16.9	140	31.4
		42	47.2	41	37.6	35	32.7	27	27.6	24	29.6	169	34.9
		47	41.2	31	28.2	33	30.0	38	34.5	16	19.5	165	31.4
9	幼小中	24	24.0	33	28.4	43	52.4	34	44.2	33	46.5	167	37.4
		24	27.0	45	41.3	48	44.9	50	51.0	34	42.0	201	41.5
		38	33.3	50	45.5	46	41.8	48	43.6	48	58.5	230	43.7
10	幼小中	78	78.0	97	83.6	54	65.9	56	72.7	42	59.2	327	73.3
		65	73.0	83	76.1	88	82.2	61	62.2	51	63.0	348	71.9
		92	80.7	81	73.6	73	66.4	77	70.0	57	69.5	380	53.2
11	幼小中	6	6.0	5	4.3	5	6.1	3	3.9	2	2.8	21	4.7
		6	6.7	9	8.3	3	2.8	11	11.2	3	3.7	32	6.6
		5	4.4	6	5.5	4	3.6	7	6.4	3	3.7	25	4.8
12	幼小中	21	21.0	12	10.3	6	7.3	7	9.1	9	12.7	55	12.3
		4	4.5	10	9.2	12	11.2	25	25.5	5	6.2	56	11.6
		13	11.4	14	12.7	4	3.6	17	15.5	10	12.2	58	11.0
13	幼小中	77	77.0	104	89.7	68	82.9	70	90.9	62	87.3	381	84.4
		82	92.1	98	89.9	92	86.0	73	74.5	65	80.2	410	84.7
		96	84.2	93	84.5	99	90.0	82	74.5	64	78.0	434	82.5
NA	幼小中	3	3.0	2	1.7	2	2.4	1	1.3	5	7.0	13	2.9
		1	1.1	0	0.0	1	0.9	4	4.1	9	11.1	15	3.1
		5	4.4	2	1.8	1	0.9	6	5.5	7	8.5	21	4.0

## IV. 調査結果とその考察

## 1. 家 と 長 男

旧家族制度時下においては長男の誕生は家督相続人の誕生であり、家の安泰と繁栄をその一身に期待したのであるが、家族制度が崩壊して個人が平等に処遇されることを原則とする現在の家庭ではどのような意識の変化がみられるのであろうか。但し40代以上の親の中には旧家族制度時下に長男を設けているものがあることを注意しなければならない。

調査対象数1,452名のうち長男を設けている者1,247名、この中で「家をつぐものができてよかった」と答えているものは51%である。これを各分析視点である男女別、年齢別、核家族、拡大家族別、職業別、幼児・小学生・中学生別では次のようになっている。

男女別では第4表が示しているように、男親が56%、女親45%を占め、男親が女親に比べて「長男が生れて、家をつぐものができてよかったと思った」と答えているものが多いということは、男親が女親に比べてより旧家的意識が強く、女親が男親に比べてより近代的家意識が先行していることは示す注目すべき結果である。

家族構成別では、第6表が示しているように核家族48%、拡大家族54%を占め、拡大家族が核家族よりやや「長男ができて家を継ぐものの誕生」という喜びの感情が強くあらわれていることは、拡大家族がより旧家意識が強いことを示している。

年代別では第8表が示しているように20才代が36%、30才代44%、40才代56%、50才代74%を占め、若い世代においてより低く、年代に比例して高くなっている。年代別で特に注目されることは、20~30才代の親に比べて、40才代の間にはっきりした差がみられることである。戦後の若い世代の親と戦中、戦前の親では家意識にかなりはっきりした相違がみられるのである。

職業別では第10表が示しているように、農業が最も高く62%、建設業56%、漁業53%、サービス業45%、製造業43%、やや低いものには運輸通信業40%、卸・小売業40%、最も低いのは公務員35%である。

「家」を継ぐという意味には、親の立場で子に期待するごく普通の内容において、家業を継ぐという意義、生活共同体としての「いえ」をつぐという意義が考えられる。この場合すべての親に日本のそれぞれの「産業」または「職業」を継ぐということまでの意識は期待できないから、家をつぐという三つの意味のなかからこの点は一応除外して考察することにするものである。<sup>5)</sup> 調査結果において前者2つの家を継ぐという意義で、長男が生れたとき家をつぐものができてよかったと思ったと答えた者のうち高い比率を示しているのは、生活共同体としての「いえ」を継ぐことと共に「家業」をつぐことを長男に期待する親である。例えば農業、漁業に従事する親の如きはこれに当たる。一方低い比率を示しているものは、「家業」を継いでもらわなければならないという切実感のない、いわゆる「やとわれ人」に属する親で、生活共同体としての「いえ」を継ぐことを期待する者である。例えば公務員の如きものである。

幼児、小学生、中学生の親別では第12表が示しているように、幼児の親38%、小学生の親52%、中学生の親60%を占め、成長度の高い子の親ほど高い比率を示している。これは大体年代

5) 北上市における農業後継者問題の実態—東北大学教育学部農民教育研究調査報告—岩手県農業青年教育協議会 p.5

別の相違と同じ理由によるものと考えてよいのであって、若い親と年輩の親との家意識の相違をあらわしているものであるとみることができる。

地域別では第2表が示しているように、大東65%、前沢54%、三陸54%が高い比率を占め、花巻40%、釜石39%が前者に比べて低い比率を占めている。即ち旧宿場町で旧生活様式の名残りの強い大東、農村の前沢、漁業の三陸などの家業をもっている地域に高く、公務員や工場労働者の街である花巻、釜石に低い比率があらわれているのである。

以上各分析視点によって「長男が生まれたときは、家を継ぐものができてよかったと思った」と答えたものについて記載し考察してきたのであるが、このような意識を生成させる条件のうち、最も有力な要素となるものは、年代の違い即ち戦前、戦中派と言われる人々と、戦後派の人々と いわれる者の意識の相違並びに職業関係即ち「家業」をもつ者と「やとわれ人」である者の家意識の相違である。

家を継ぐ長男の出生を特別喜ぶという感情は、とかく兄弟姉妹の取扱いに差別をもつ源泉となるものであって、子供の知育、徳育、体育の発達を完全に遂げさせるという教育の原則を強く歪曲させる原因となる。これは経済的理由による差別に比てきされるべきものである。この意味において親の家庭教育意識を探ぐる基本的な内容と意味をもつものであると考える。

## 2. 教育における男女の差別観

家において長男とその他の子を差別することは重大であるが、性別による子の差別も前者と共に重大である。教育はこれを享受する者にとっては、その能力に応じてほしい教育を受ける権利即ち教育享受権が人間の基本的人権として保障されているのであって、性別を理由とする教育差は現代人の意識や現代社会から追放されている筈であるが、しかし乍ら社会の現実是非同時的なものが同時に存在するところであってみれば、子の親達は現実には男女平等の教育に対して、どのような意識をもっているものであろうか。

「男の子は女の子にくらべて高い教育<学校>をうけさせなければならない」と答えた親は、調査対象数1,452名の30% (440名) を占めている。これは調査対象者に対して吾が子の教育について、現実には男女の相違によって差をつけていないかというのではなく、親のもっている意識そのものであるということを考えれば、30%の親が男女の性別による教育の差別を当然と考えているのであるから、決して比率として低いものではないと考えるのである。

男女別では第3表が示しているように、男親が28%、女親33%を占め、女親が男親に比べてやや高い比率を占めているのであるが、女子を男子と平等な地位までという女性運動の最も基本になるのは男子と同等の教育を受け、男子と同等の実力を身につけることである筈であるのが、このように母親が性別による教育差別観をもつものがその3分の1を占めていることは注目に値するものである。長男の生れたことを家を継ぐ者ができたとして喜ぶという問1において、近代的意識を男親に比べて強く出している母親は、教育を性別によって差別視することに対して、男親よりやや多く認め、伝統的な性の差別観をもっていることは矛盾した意識の共存という点で問題である。

核家族、拡大家族別では第6表が示しているように、核家族が33%、拡大家族28%を占め、核家族が拡大家族より性別による教育の差を認めるものが多くなっているのが注目される。とかく核家族が若い世代の家庭であり、拡大家族は年輩者の住む家庭という意識で家族構造をみるから、このような調査結果を奇異に感ずるのであって、核及び拡大家族において必ずしも核家族は

若い夫婦と小さい子との家族集団ときめつけられないことを物語っているのである。

年代別では第8表が示しているように、20才代が19%、30才代31%、40才代32%、50才代22%を占め、20才代と30才～40才代に意識の断層がみられる。50才代になると逆に低い比率を占めている。これはこの外の問いの中にもみられる傾向である。

職業別では第10表が示しているように電気ガス業43%、製造業40%が高い比率を占め、次いで建設業34%、公務員33%、卸・小売業32%を占め、比較的低いものは農業24%、漁業21%、サービス業26%である。注目されることは農業、漁業などで性別を理由に教育に差をつけることをよしとする考えの親は他の職業に従事する親より少ないことが目立っていることである。これは農漁民の意識の成長を物語るものとして注目されることである。

幼児、小学生、中学生の親別では第12表が示しているように、幼児の親が26%、小学生の親33%、中学生の親31%を占め、幼児の親が中・小学生の親に比べて低い比率を占めている。これも若い世代に属する者の多い幼児の母の考え即ち若い世代の親の考えという内容のものである。

地域別では第2表が示しているように、釜石が43%、花巻32%、大東30%、前沢25%、三陸20%を占め製造業の多い釜石地域、公務員及び卸・小売業の多い花巻において性別を理由に教育上の差を容認するものの比率が他に比べて多いことは注目される。これに対して農業、漁業の職業の多い前沢、大東、三陸において低い比率を占めていることは興味のあるものである。

以上のように性別を理由に教育上差別的取扱いをすることの是非の問題についても、各分析視点の中で最も有力な条件となっているものは、職業並びに年齢であるということが言えるようである。

### 3. 性格は生れつきか、育てかたか

性格形成の論争は学問の世界でも大きな関心事であるとともに、一般市民や親の間でも関心が深く、その経験に基づいて論議のあるところである。即ちこの問題は学者にとっても庶民にとっても関心のある問題である。詫摩武俊氏は性格が遺伝か環境かの問題については、その民族のもつ人間観というものが一つの役をもっているようであると述べ、動的で未来に希望をもつ民族では環境説が、伝統を重視する静的な民族社会では遺伝説が信ぜられる。<sup>6)</sup>と記しているが、氏の所説にしたがえば、今日の日本社会は全く動的であってその変ぼうがめまぐるしい現状から言って、性格形成論においては環境説が優勢であることが考えられるのであるが、調査結果も正にその通りであって、「子どもの性格は育てかたより生れつきによるところが大きい」と答えているものは調査対象数1,452名の21% (307名) であるのに対して「子どもの性格は生れつきより、育てかたやまわりの人々のえいきょうが大きい」と答えているものは73% (1,061名) であって性格形成に環境説をとるものが圧倒的に多くなっている。

これを男女別にみれば第4表が示しているように、遺伝説をとるものは男親が21%、女親が22%を占め、両者間に有意差が認められない。これに対して環境説をとるものは男親、女親ともに73%を占めている。このように性格形成における遺伝か環境かについて男女親には、その支持率において差がない。

核家族、拡大家族別では第6表が示しているように遺伝説をとるものは核家族が22%、拡大家

6) 詫摩武俊 性格はいかにつくられるか。p.181

族 20% を占め、核・拡大家族の支持率に有意差がみられない。また、性格形成に環境説をとるものも核・拡大家族ともに75%を占めているのであって、家族構成別による分析技間の差はみられない。

年代別では第8表が示しているように、遺伝説をとるものは20才代10%、30才代19%、40才代24%、50才代31%を占め、年代順に高い支持率を示しているが、明らかに年代の違いによって有意差がみられる。これに対して環境説をとるものは20才代87%、30才代74%、40才代71%、50才代73%を占め、20才代の若い親が他の世代に比べて高い支持率を示している。

職業別では第10表が示しているように、遺伝説をとるものは建設業が28%、農業26%が比較的高く、卸・小売業21%などこれに次いで、公務員10%、サービス業11%など低い支持率を示している。これに対して環境説をとるものはサービス業が84%、公務員80%、製造業79%、卸・小売業76%、これらのものよりやや低いものは運輸通信業が70%、農業68%、漁業65%を占めている。職業別ではこのようにある程度の差がみられる。

幼児、小学生、中学生別の親では第12表が示しているように、遺伝説をとるものは幼児の親が13%、小学生の親23%、中学生の親26%を占めている。これに対して環境説をとるものは幼児の親が80%、小学生の親71%、中学生の親69%を占め、その間に有意差がみられる。

地域別では第2表が示しているように、遺伝説をとるものは大東が28%、三陸21%、前沢21%、釜石19%、花巻17%を占め、地域別の差がみられる。これに対して環境説をとるものは花巻が79%、釜石79%、前沢75%、大東68%、三陸60%を占め、地域別の差がみられる。このように性格形成が遺伝か環境かの問題には地域的な有意差がみられるのである。

以上のように各分析視点によって記載し考察をすすめてきたのであるが、年齢、職業、地域などの相違によって、環境とするもの、遺伝とするものの支持率に差があることが明らかになっている。

#### 4. 才能は生れつきか、育てかたか

人間の性格は遺伝か環境かという問題とともに、教育において才能即ち知のはたらきは遺伝か環境かの問題が、教育の基本問題としてある。この論争にも終止符が打たれていないが、一般に知能が遺伝するところの多い特性であることが知られている。<sup>7)</sup> 確かに知能の低い者を優れた科学者にはできない。しかし教育することなくして知の働きが不可能であることもまた事実である。本来知能と教育の関係はこのような相即不離の関係にあるが、両者のいずれが決定的要因となるかは、論争のあるところであって、要は人間各様の見方ということにつきるが、そこに遺伝説をとるものと、環境説をとるものの教育観の一つの相ができるのである。

才能は遺伝か環境かについての調査では遺伝説をとるものは調査対象数1,452名の25% (360名)、環境説をとるもの59% (857名)を占め、無答率は16.2% (135名)であって、性格が遺伝か環境かの無答率5.8% (84名)よりかなり多くなっている。

これを男女別でみれば第4表が示しているように、遺伝説をとるものは男親が23%、女親27%を占めている。これに対して、環境説をとるものは男親が61%、女親57%を占めている。男女親ともに環境説をとるものが過半を占めているが、女親が男親に比べて環境説をとるものが少なく、遺伝説をとるものが多くなっているのである。

7) 5)に同じ。p.185

核家族、拡大家族の家族構成別では第6表が示しているように、遺伝説をとるものは核家族が23%、拡大家族27%を占めている。これに対して環境説をとるものは核家族が61%、拡大家族58%を占めている。核家族は遺伝説において拡大家族より少なく、環境説においては多くなっている。

年代別では第8表が示しているように、遺伝説をとるものは20才代が15%、30才代22%、40才代28%、50才代33%を占めているのに対して、環境説をとるものは20才代が52%、30才代59%、40才代61%、50才代59%を占めている。遺伝説、環境説ともに年代的な相違があるが、20才代が他の年代より無答率(23.3%)が多いことは注目される。

職業別では第10表が示しているように、遺伝説をとるものは、農業31%、建設業30%などが比較的高い比率を占め、サービス業16%、公務員16%が比較的低い比率を占めている。これに対して環境説をとるものは公務員が68%、製造業71%、運輸通信業67%などが高い比率を占め、農業51%、漁業50%、製造業50%などが比較的低い比率を占めている。注目されることは、遺伝説をとるものが30%代、環境説で50%代を占める農業、建設業などに対して、環境説において凡そ70%、遺伝説で10%代を占める公務員、製造業の支持率の違いが注目される。

幼児、小学生、中学生の親別では第12表が示しているように遺伝説をとるものは幼児の親が18%、小学生の親27%、中学生の親28%を占めているのに対して、環境説をとるものは幼児の親が61%、小学生の親59%、中学生の親57%を占めている。このように遺伝説をとるものと環境説をとるものが幼、小、中の親別によって互に逆順になっているが、特に幼児の親の遺伝説をとるものが少ないことが注目される。

地域別では第2表が示しているように、遺伝説をとるものは釜石が20%、花巻19%、前沢28%、大東32%、三陸26%を占めている。これに対して環境説をとるものは、釜石69%、花巻65%、前沢55%、大東53%、三陸51%を占めている。このように釜石、花巻のいわゆる都市部は郡部である前沢、大東、三陸に比べて遺伝説において低く、環境説において高く、それぞれの支持率を占めている。

以上才能は遺伝か環境かについて調査結果を各分析視点ごとに述べたのであるが、遺伝説をとるものがその比率において低いものをあげれば、20才代、核家族、男親、都市部、公務員、製造業、幼児の親などがあげられるのである。無答率の関係でこれらの各分析枝がそのまま環境説において各分析視点における対立する分析枝より高い支持率を占めているというのではないが、(例えば20才代の如く)、次のようなことを言うことができる。若い年代者、都市の住人、公務員などの「やとわれ人」の中に環境説が多く、年輩者、郡部の住人、農・漁業など静的な感じのもたれる人々の間に遺伝説をとる者が多くを占めている。

## 5. 家庭教育と家族構成

家族の核化は高度経済成長政策を政府が打ち出した昭和30年代から急速に進んでいるのであるが、拡大家族に問題があるように、核家族にも問題があることが経験され、反省されるようになってきている。この時点において、「子どもの教育上」核家族のほうがよいか、または拡大家族のほうがよいかについて各個人々の親の経験から割り出した答えを求めたのはこの問いである。教育上核家族がよいか拡大家族がよいかは机上の思索ではそれぞれの理由、条件によるものであって、むしろ問題はその条件にあることは明らかであるが、しかし条件は各自の意思によって任意に作為できるものではなく、社会の現実の大勢は各自の意思を無情に踏みじって既成的



に存在するものである。このような現時下の既成化された生活条件の中で一つの相となっている核家族と拡大家族という対置条件が教育上いずれを否としいずれを可とするかについて素直な答えを得ることは、以上のような前提によるならば有意義と考えるのである。

子供の教育上夫婦と子どもだけの核家族がよいと答えたものは調査対象数 1,452 名の 33% (474 名) を占めているのに対して、子供の教育上夫婦、子、祖父母が同居する拡大家族のほうがよいと答えたものは 41% (598 名) である。家族構成が核家族化の傾向を急速に迎っている中で、こと子どもの教育という立場からは拡大家族のほうがよいという意見が多数派であるということは注目に価する事実である。これは拡大家族の再評価のきっかけをつくる一つの有力な事柄であるように考えられる。

子供の教育上核家族と拡大家族の是非論を先ず地域別にみれば第 2 表が示しているように、拡大家族より核家族のほうがよいと答えているものが多いのは釜石市であって、その 46% が核家族がよいと答え、これに対して拡大家族のほうがよいと答えたものは 29% にすぎない。これは釜石地域以外の地域が拡大家族が核家族よりよいという答えが多いのとは逆になっている唯一の地域である。

核家族、拡大家族の家族構成別では、第 6 表が示しているように、子どもの教育上夫婦と子どもの核家族がよいと答えているものは核家族が 35%、拡大家族 31% を占めているのに対して、祖父母が同居する拡大家族がよいと答えているものは核家族が 36%、拡大家族 46% を占めている。このように核家族においては僅かに、拡大家族においてははかり多くのもが教育上は拡大家族の方が核家族よりよいと答えているのである。

男女別では第 4 表が示しているように、子どもの教育上核家族がよいと答えているものは男親が 33%、女親 32% を占めているのに対して、祖父母が同居する拡大家族がよいと答えているものは男親が 42%、女親 40% を占めている。各支持率にはそれほどはっきりした差がないのであるが、無答率が男親 15% に対して女親 27.5% となり、女親のなかにはっきりした答えが出せないものが多いことは注目される。

年代別では第 8 表が示しているように、教育上核家族のほうがよいと答えたものは 40 才代が 39%、30 才代 31%、50 才代 21%、20 才代 16% を占めているのに対して、拡大家族のほうがよいと答えたものは 50 才代 57%、20 才代 48%、40 才代 40%、30 才代 39% 才代を占めている。各年代ともに拡大家族が子供の教育上よいと答えているのであるが、20 才代と 50 才代が他の年代に比べて拡大家族支持率は核家族支持率より明確に高いこと並びに 20 才代と 30 才代において無答率が多いことが注目される。

幼児、小学生、中学生の親別では第 12 表が示しているように、子供の教育上核家族がよいと答えたものは幼児の親が 31%、小学生の親 35%、中学生の親 31% を占めているのに対して、拡大家族のほうがよいと答えているものは幼児の親 37%、小学生の親 42%、中学生の親 44% を占めている。幼児の親の核家族の支持率が低いこと並びに中学生の親の核家族の支持率低く、拡大家族支持率が高いのは前述の年代との関係によるものである。

職業別では第 10 表が示しているように、子どもの教育上核家族のほうがよいと答えているものは運輸通信業が 50%、製造業 44%、公務員 29%、卸・小売業 28%、農業 27%、建設業 26%、漁業 18% を占めている。これに対して拡大家族のほうがよいと答えているものは漁業が 56%、農業 48%、サービス業 47%、建設業 44%、公務員 44%、卸・小売業 43%、運輸通信業 23%、製造業 31% を占めている。注目されることは運輸通信業並びに製造業に従事する親の中に子供

の教育上拡大家族よりも核家族のほうがよいと答えたものが多いことである。この外の職業においては拡大家族が核家族より教育上よいと答えているのである。また他の分析視点においても地域別で釜石が、拡大家族より核家族がよいと答えているのみである。

以上子供の教育上核家族がよいか、拡大家族がよいかという個々の家庭の事情が深く関係する問いであったが、全体的にも、また釜石地域並びに運通業及び製造業を除いて各分析視点の各分析枝において子供の教育上は拡大家族が核家族よりよいという意見が多きを占めている。しかし各分析枝においては拡大家族がよいとするものの中で特に顕著なものは地域別の三陸、大東などの農村部(郡部)年代別の50才代、家族構成別の拡大家族、職業別の漁業、農業などである。これに対して核家族がよいとするものの中では地域別の釜石、職業別の運輸通信業、製造業、年代別の30~40才代が顕著なものとして挙げる事ができる。

#### 6. 子供の教育上夫婦共稼ぎの是非について

現代人に及ぼす消費生活の圧力は人間の他の生活の犠牲をも省りみないほど強くなっている。したがって家庭の団らんも家庭教育もある程度の消費生活水準を保つ、またはめざすためにはその犠牲となっても仕方がないというのは現代人感覚であり、更に言うならば果てしなく続くであろう現代的消費生活水準に幻惑されて、これを達してはじめて家庭の団らんも家庭教育もできるという「先ず経済」という生き方が現代人の基底的生活様式となっているのであるが、子供の教育上、夫婦共稼ぎで母親が家をあけるということに対して、意識としてこれを是としているか、また否としているかを捉えようとするものである。

「子どもの教育上夫婦ともかせぎで、母親が家をあけるのはよくない」と答えているものは調査対象1,452名の73%(1,055名)であるのに対して、「子どもの教育上、夫婦ともかせぎで、母親が家をあけるのはよくないと思わない」と答えたものは僅か5%(78名)にすぎない。無答率は22%(279名)である。

地域別では第2表が示しているように、夫婦ともかせぎはよくないと答えているものは釜石が79%、花巻78%、前沢72%、大東68%、三陸64%を占めている。これに対して「夫婦ともかせぎで、母親が家をあけるのはよくないと思わない」と答えているものは三陸が3%、前沢4%、花巻6%、釜石6%、大東7%を占めている。共稼ぎを不可とする都市部と無答率の高い郡部が注目される。

男女別では第4表が示しているように、教育上ともかせぎを否定するものは男親が71%、女親が75%を占めているのに対して、夫婦ともかせぎを肯定しているものは男親5%、女親6%を占めている。このように夫婦ともかせぎを否定するものも、また肯定するものも女親が男親に比べて多くなっているが、これは女親の無答率が男親のそれに比べて低いことによるもので、この問いには女親の方は男親より積極的に応答していることが注目される。

核家族、拡大家族別では第6表が示しているように、夫婦ともかせぎを否定しているものは、核家族が75%、拡大家族71%を占めているのに対して、夫婦ともかせぎを肯定しているものは核家族7%、拡大家族4%を占めている。夫婦とも稼ぎと教育の問題について核家族と拡大家族の間には以上のように有意的な差をみることはできない。

年代別では第8表が示しているように、子供の教育上夫婦ともかせぎを否定するものは20才代~50才代まで殆んど同じ比率を示している。その比率は73~74%である。これに対して肯定するものは4~7%にすぎない。年代別による有意差は認められない。

職業別では第10表が示しているように、夫婦ともかせぎを否定する比率の高いものは、製造業の79%、公務員79%、卸・小売業74%、建設業72%などである。これに対して夫婦ともかせぎを教育上から肯定するものは、卸・小売業9%でやや他に比べて高い比率を占めている。教育上夫婦ともかせぎを否定するものの中で製造業などのように母親が家をあける家庭において高い比率を占め、母親が家をあけない夫婦ともかせぎである農業、漁業においてやや低い比率を示していることが注目される。

幼児、小学生、中学生の親別では第12表が示しているように、子供の教育上夫婦ともかせぎを否定するものは、幼・小の親が73~72%を占めているのに対して、中学生の親が53%を占めているにすぎない。これは幼・小の子に対する夫婦ともかせぎの与える影響と中学生に与える影響では問題にならない事によるものである。しかし、その中学生の親であっても、積極的に夫婦ともかせぎを肯定するものは僅か5%にすぎないのである。

教育上夫婦ともかせぎの是非についての問いは、他の問いに比べて、二者一選択が一方の分析枝にのみ傾いたものは他にないのである。即ち各分析視点における各分析枝のすべてにおいてこれを否定する者が圧倒的に多かったのである。

現実はいくつかの親の意思とは逆に、母親の労働力は動員されているのである。現代の母親の労働力の動員は直接的な動機は消費生活の圧力に負うところが多いであろうが、しかし母親が労働して職場に立つということはそのもう一つの意義として、人間解放、男女平等など母親の人権の確立につながっているものである。したがってこの調査結果は母親の家庭復帰の好材料にするというような単純に処理することなく、むしろ新しい教育の創造への出発点として使用したものである。即ち母親の労働と子供の教育の矛盾のない教育観と教育実践の創造のための資料たり得たいということである。

## 7. 家庭教育について

教育の概念は学校教育によって代表されているくらい学校教育は教育の上で重要な地位を占めている。したがって家庭教育も多分に学校教育の下請負いのようなことで終始していることが、その実状である。しかし教育のすべては学校教育でもなく、学校教育はそれ程万能ではないのである。教育には家庭でなければできない家庭教育がある。また家庭では本来は家庭教育に属するものではないが、家庭を対象とした学習や学校の宿題などの家庭における教育が行なわれている。家庭教育とこれら家庭における教育とは概念上明確に区別されなければ、真の家庭教育は効果をあげることはむずかしいことは言うまでもないことである。このような家庭教育に関する基本的な意識を捉えようとして実施した調査結果は次の通りである。

「子どもの教育は幼稚園や学校にまかせることはいちばんよい」と答えているものは、調査対象数1,452名の12% (169名) にすぎないのに対して、「子供の教育は幼稚園や学校だけのものではなく、家庭でなければできないものがある」と答えているものは84% (1,225名) を占めている。これは多くの親が家庭本来の教育のあることを認識していることを示したものである。尚、いずれにも答ええないものは4% (54名) を占めているにすぎない。無答者が少ないことはこの問題に対してははっきりした考えをもっていることを物語るものである。

地域別にみれば第2表が示しているように、「子供の教育は学校まかせがよい」と答えているものは大東17%、釜石13%、花巻11%、三陸10%、前沢7%となっている。これに対して「子供の教育には家庭でなければできないものがある」と答えているものは、花巻が88%、前沢87%

%, 釜石85%, 三陸82%, 大東79%となっている。答えのないものは1~6%であるが、大東の6%が高く、郡部が都市部に比べて無答率がやや高くなっている。

男女別では第4表が示しているように、「子供の教育は学校まかせがよい」と答えているものは男親が11%, 女親12%を占め、有意差が認められないが、これを地域毎男女別でみれば男親において釜石14%, 大東15%, 女親において大東20%を占め、やや高い比率を示している。これに対して「子供の教育には家庭でなければできないものがある」と答えているものは男親が84% 女親85%を占め、地域毎男女別では大東の男親が76%を占めて、やや低くなっている。

核家族、拡大家族別では第6表が示しているように、「子供の教育は学校まかせがよい」と答えているものは核家族が12%, 拡大家族11%を占めている。これに対して「子供の教育には家庭でなければできないものがある」と答えたものは核家族が84%, 拡大家族86%を占めている。このようにいずれの答えにおいても核、拡大別の有意差が認められない。

年代別では第8表が示しているように、「子供の教育は学校まかせがよい」と答えているものは、20才代が10%, 30才代13%, 40才代11%, 50才代9%を占めているが、20才代と50才代がやや低い比率を占めていることが注目される。これに対して「子供の教育には家庭でなければできないものがある」と答えているものは20才代が84%, 30才代83%, 40才代85%, 50才代96%を占めている。50才代の比率が高くなっているが、年輪を重ねた経験から打ち出された結論としての教育意識であることに敬意をもってうけとめたい。

職業別では第10表が示しているように、「子供の教育は学校まかせがよい」と答えているものは建設業が16%, 製造業, 卸・小売業, 農業が各13%を占めているが、公務員, 漁業は3%を占めているにすぎない。これに対して、「子供の教育には家庭でなければできないものがある」と答えているものは公務員が93%, 運輸通信業90%, 製造業, 卸・小売業86%, サービス業84%, 農業82%, 漁業79%, 建設業70%を占めている。公務員などは「学校まかせ」が少なく、「家庭でなければできないものがある」において多くなって、その支持率は前者に低く(3%), 後者に高く(93%)になっているが、これと対照的なのは建設業である。このように職業別においてはこの答えに有意差がみられる。

最後に幼児, 小学生, 中学生の親別では第12表が示しているように、「子供の教育は学校まかせがよい」と答えているものは、幼児の親が12%, 小学生の親12%, 中学生の親11%を占めている。これに対して、「子供の教育は家庭でなければできないものがある」と答えた親は、幼児の親が84%, 小学生の親85%, 中学生の親83%を占めて、幼・小・中の親別による有意差は認められない。

以上のように各分析視点における各分析枝で、それほどはっきりした差が出ていないのであるが、地域別, 年令別, 職業別分析視点においてやや差異をもった比率が顕われている。

#### IV. あとがき

はじめにおいても述べたように本稿は、子供の親を対象にして教育の基本的な問題であり、現在も継争中である問題並びに教育の今日的な問題について素朴な答えを記述し考察を加えたものである。

分析視点は各問いを通じて同じ視点によったものである。したがって有意差のないような分析視点もあったのであるが、それはそれなりに意義のあるものと考えている。

7つの事項に亘っている問いは、2つの型に分けられるもので、問いの1並びに3の型と問い

4~5, 6~7, 8~9, 10~11, 12~13の型であるが、後者の型の各問いの応答率は12~13の家庭教育に関するもの96.0%, 4~5の性格形成に関するもの94.2%, 6~7の才能に関するもの83.8%, 10~11の教育と夫婦ともかせぎに関するもの78.1%, 8~9の教育と家族構成に関するもの73.8%となっている。これらについて2, 3注目される点がある。まず、性格形成と才能に関する問いはいずれも遺伝か環境かに関するものであるが、応答率は性格に関するものが高くなっていることである。これは性格形成は遺伝か環境かについての意見は才能のそれよりも経験上多くの親がはっきりした意見を述べることができたことによるものであるが、教育をするもの特に教員は、教育特に知育の面において、子供に対して万全の用意と努力が果して為されているものであったかという疑問が、親にもたれているのではなからうか。即ち教育は手を尽すだけは尽したという親の素朴な期待に答えていないことを示しているではなからうかという反省がもたれるものである。

次に、子供の教育上核家族がよいとか、拡大家族のほうがよいや子供の教育上夫婦ともかせぎがわるくない、わるいなどは各個々の調査対象者の生活事情に深くつながるものであって、各分析視点における各分析枝（例えば年代別における20才代、30才代の如く）において、各2問1組の問いに対する答えに全く逆な支持率（例えば20才代の是が30%, 否60%である問いに、30才代の是が60%, 否30%の如く、是と否の支持が全く逆になるようなこと）を占めるというようなことは極めて稀れであって、ただ教育上夫婦共稼ぎの是非について、地域並びに職業別において僅かの例があったにすぎない。このように2者選1傾向は安定した結果を出して、その間において社会通念が形成されていることが伺われるのである。

問いのなかに無答者が多く無答率の高いもの、例えば教育上の夫婦とも稼ぎの是非など無答率は21.9% (219名) を占め、高い比率を占めているが、夫婦ともかせぎを否とするもの72.7%, これを是とするもの5.4%に対する無答率であることをみれば、これを否とする72.7%の占める比率は決して低いものでなく、子をもつ親の大多数の意見とみることができるのである。